

欧州でホロコーストを学ぶ中、あらためて悲惨さを痛感するとともに、平和の実現は国民の手にかかっていると気づかされました。「私たちに、正しくない人に権力を握られないようにする責任がある」。インタビューしたオシフィエンチム市長の言葉が心に響きました。ホロコーストを実行したナチスは、国民の選挙で第1党に選ばれました。

平和の維持は政治家だけではなく、私たち個人個人の責任でもあるのです。

日本で生まれた私たちは戦争を知りません。平和な暮らしは当たり前であり、特に意識することはありませんでした。日本では来年から、18歳以上が選挙に参加できる見込みです。私たち10代も選挙の重要性を自覚し、責任を持って政治家を選ぶ必要があります。

「正しくない人」が権力を握らないように注意すると同時に、若者が政治や世界情勢に関心を深め、平和活動に積極的に参加することも大切です。そうすることで、世界平和に一歩でも近づけるのではないかと考えています。

広島大2年 土江 友里子さん(19)

今回のスタディーツアーに参加して、今までは経験しえなかった濃密な時間を過ごすことができました。どうして人はここまで冷酷になれるのか、どうして相手の痛みを思いやるのができなかったのか。実際に自分の目で、アウシュビッツ強制収容所の跡やアンネ・フランクの隠れ家を見て、疑問が湧き続けました。

私たちが踏み出せる平和への第一歩は、戦争にまつわる物からしか発せられない「声」を感じること、その声に耳を傾け行動することではないかと、強く感じるようになりました。

「悲劇を二度と繰り返さないために、もし同じことが起きたらどうなるのかという想像力を、謙虚に持ち続けることが大切だ」。強制収容所跡を案内してくれた公認ガイドの中谷剛さん(49)の言葉がとても印象に残りました。

ツアーで経験したこと全てを整理するには、まだまだ時間がかかりそうです。しかし、ゆっくりとかみ砕いて、私なりの平和観、価値観をつくる材料にしていきたいです。

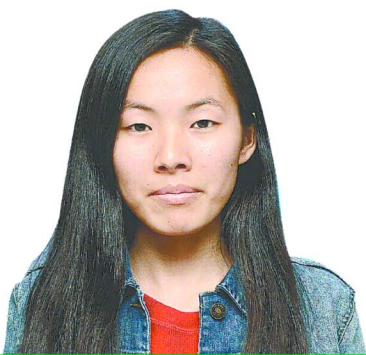
県立広島大2年 時盛 郁子さん(19)

アンネ・フランクの隠れ家で、彼女が生活した部屋に入ると、壁一面に貼った俳優の写真の切り抜きが目飛び込んできます。壁には伸びていく身長を確かめた印が刻まれたままです。一つ一つが、アンネたち8人が息を潜めつつも、生きる望みを捨てずに暮らした日々を物語っています。

アンネらが隠れ住むことができた背景には、父オットーの会社の従業員たちの存在がありました。ナチスのユダヤ人迫害政策や、周囲の人々の意識に流されることなく、支援した人々でした。ロナルド・レオポルド館長は、こう私たちに呼びかけます。「皆さん、彼らのような支援者になってください」

最近、ヘイトスピーチが日本でも社会問題になっています。人権をないがしろにし、特定の人を虐げることは、学校でのいじめ、家庭や恋人間の暴力でも起きています。レオポルド館長の言葉を胸に刻み、差別を人ごとと捉えていた自分の姿勢を改め、誰もが人間らしく生きられる社会を築く手助けをしていきます。

広島大3年 松川 純さん(20)



大学生の思い

5月31日に帰国報告会

被爆・終戦70年を機に企画された、ホロコースト(ユダヤ人大虐殺)について学ぶ欧州スタディーツアー(主催・公益財団法人ヒロシマ平和創造基金)には、広島県内の大学生6人も参加しました。

中国新聞ジュニアライターの高校生2人と一緒に、ポーランド・オシフィエンチム市ではアウシュビッツ強制収容所跡を見学。当時の建物や遺品を保管・展示する国立博物館の副館長から、歴史継承のための取り組みについて聞きました。同市の市長は、平和に向けた個人の役割の重要性を強調していました。オランダに移動後は、アムステルダム市にあるアンネ・フランクの隠れ家を訪問。平和を目指して行動を始める決意を新たにしました。

大学生6人が取材した記事と、感想を紹介します。



ツアーの成果は、5月31日、広島市中区中島町の広島国際会議場で開く帰国報告会で発表します。ツアーは広島市、公益財団法人広島平和文化センター、平和首長会議の後援を得ています。



ポーランドの若者たちと意見交換するツアー参加者(右側)

戦争を伝える義務 心新た 現地若者と意見交換

「車で近くを通ると家族全員が無口になる。その後、アウシュビッツ強制収容所で何が起きたか、親が話してくれるんだ」。オシフィエンチム市の若者と開いた意見交換会で、現地の男子高校生(19)はこう話しました。悲劇の象徴を人ごとではなく、身近な問題として捉え、育ってきたことを教えてくださいました。

会には、現地から高校生9人と大学生1人が参加、平和学習などについて話し合いました。ポーランドでは、事実を正しく受け止められるまで成長した中学3年になって、ホロコーストの歴史を学び始めるそうです。小学生の時から原爆の悲惨さを学習する広島との違いに驚きました。

「第2収容所のビルケナウにはまだ行ったことがない。歴史をし

っかり学んでから訪れたい」。女子高校生(19)の言葉には、何も知らずに見学するのではなく背景を理解したうえで過去を受け入れたいという意志がにじんでいました。

若者が戦争の悲劇を継承する方法にも話題は広がりました。オシフィエンチム市主催の平和音楽祭では、各国から多くのアーティストが参加、平和を訴えます。コーディネーターを務めた経験のある男子高校生(19)は「このイベントを通して、多くの人に“no more wars”と伝えたい」と話しました。

歴史を、ただ学んで終わりにしたくはありません。現地の学生の意見に耳を傾けたことで、広島との意見として、戦争の惨禍を後世に伝えていく義務をより強く感じました。(松川純)

歴史の過ち学ぶ「出発点」

アンネ・フランク・ハウス館長

「アンネ・フランクの隠れ家には、喪失感が詰まっている。この悲劇は、人間が引き起こしたという事実を忘れないでほしい」。隠れ家を利用した資料館「アンネ・フランク・ハウス」のロナルド・レオポルド館長はしっかりした口調で私たちに呼び掛けました。一人の女の子が日記をつづった場所は、人間の犯した過ちを学ぶと同時に今の平和や戦争に思いをはせる「出発点」になっています。

オランダ・アムステルダム市の運河に面した細長い4階建て。ナチスに支配されていた1942年から約2年間、アンネをはじめ8人のユダヤ人が迫害から逃れ隠れ住んでいました。連行後に残っていたのが、アンネの書いた日記でした。

「当時はまだ希望があり、将来に対する楽観的な願いもつづってあった」。レオポルド館長は、解放を願ったアンネの気持ちを代弁します。45年、アウシュビッツ強制収容所から生還した父オットーは、この日記を手に入れます。

何もなくなった隠れ家は、妻と娘2人を失ったオットーの気持ちと、6万人のユダヤ人が消えたアムステルダムの街の二つの喪失感を物語っています。今、毎年90カ国以上から約120万人が訪れます。レオポルド館長は「歴史を語る場所、悲劇を物語る場所」と表現。若者らに訪れてもらい、今なお戦火や暴力が絶えない世界の現状と、過去の悲劇に考えを巡らせてほしいそうです。

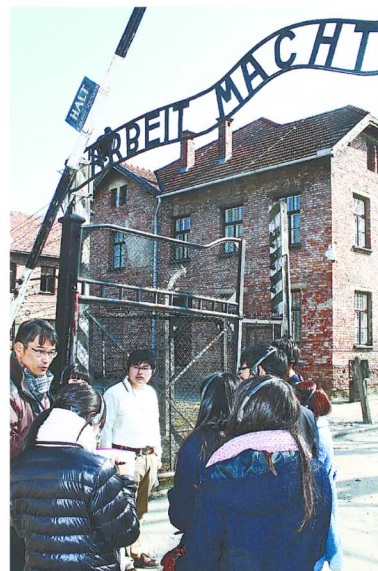


次世代継承の取り組みについて説明するレオポルド館長

「(ホロコーストは)自然の成り行きで起きたのではない。当時の人が実際に選択してやったことなのだ」と力を込めます。

ハウスは3年前、次世代に継承するため、平和大使を募る制度を創設。研修を受けた若者が同世代に、展示品の案内などを通じて平和の大切さを伝えていきます。将来のリーダーになる若者に期待が寄せられます。

「見学を終えた時、『アンネの日記』をパタンと閉じて最後まで読んだという気持ちになって帰ってほしくない」。職員の一人は、そう訴えます。隠れ家訪問はゴールではありません。歴史から学んだことや感じたことをどう生かしていけるのか。今も自問自答しています。(田辺美咲)



アウシュビッツ強制収容所跡を見学するツアー参加者。正門の上にはドイツ語で「ARBEIT MACHT FREI(働けば自由になる)」と書かれた標語の一部が見える

クリック

アウシュビッツ強制収容所 ナチス・ドイツは第2次世界大戦中、欧州でユダヤ人や少数民族ロマたち約600万人を組織的に虐殺した。ホロコースト(ユダヤ人大虐殺)と呼ばれる。アウシュビッツ強制収容所は最大規模で、1940年6月、現在のポーランド南部のオシフィエンチム市郊外に開設された。当初はポーランド人政治犯を収容していたが、42年からユダヤ人を主な対象とする「絶滅収容所」に。45年1月に当時のソ連軍が解放するまで、欧州全域から移送されたユダヤ人に加え、ロマ、ソ連軍捕虜ら100万人を超す犠牲者を出した。79年、世界文化遺産に登録された。

アンネ・フランク 1929年にドイツ・フランクフルトで生まれたユダヤ人の少女。ナチスの迫害を逃れ、13歳から約2年間、オランダ・アムステルダム市の隠れ家で暮らした。44年8月に15歳でナチスに捕らえられるまでの2年余りの日々を日記につづった。45年、強制収容所で亡くなった。